

中国入門

香港、一九〇九年五月二十五日

これらの高く、優雅で高貴な山々は、英国の所有にもかかわらず、中国の大地だ。所有者が、それらを素晴らしいものにしたことは認めよう！

到着したのは不条理にも夜。サンパン〔本造小型の平底船〕船員たちの喧噪。吹きつける強風のなかで目覚める。山の頂を覆う雲、厚い雲、そして雨。——わたしは大地に、いや水のなかにまい降りる。しかしなんと絵画的な風景か！ この地にもっともふさわしい形容詞だ。低い山並。すり鉢状になった路地や家々、雑貨店、湿って匂いのある緑の塊。英国風に巧みに秩序づけられた看板、色物、太陽そして雲。

サンパン船員たちは家族で航行する。母の胸に顔を埋めている一番下の子を筆頭として。あらゆる手段で（火事、毒、詐欺——一八九一年に、香港から百マイルのところ、中国乗組員によって略奪された蒸気船ナモア——）英国人たちを撲滅していた海賊の息子たち。

ついで、まもなく、夕陽と涼しさのなか、出発。——そして、美しく熟した果物の形を愛おしく触って確かめるように、われわれの、ゆったりとした、しかし確実な歩みによって、小球状の中国が間隔をおいた足

跡で包まれるのだ。わたしは貪るようにその果汁を絞ることになるう——

上海、五月二十八日

まず、台湾に対して文句を言おう。運河に、冷たくて、灰色の北東のモンスーンの残りのようなものがまだあったから。貨物船シドニー（一〇ノット）は、冷たく、空っぽで、それ自身、灰色だ。

無数の島々。入港前に、およそ一五〇マイルを航行。——岸につくまでずっと巨大な大河があり、堤から奪った泥土で青い水を一杯にしなげら、海に泥を吐き出している……河上には、大きな穴のあいた、半分ブルターニュと中国の帆をなびかせたジャンク〔帆をずる〕が散らばっている。ついで空が穏やかになる。上方にはとても細かい紺青色のものが、低い地平線には一時的な靄がみてとれる。水とすれすれの、繊細な、パステル調の緑色の海岸。農場や乾草・藁の堆積のシルエツト。そして水は、——汚くはない——太陽と空の、同様にとても細かい筆づかいの下で、水は青みがあり、ときとしてあの「オーベルニュの石」の青く、錆びついた影を一面に映し出している。日が沈むのも繊細だ。冬のような、しかし厳しくない天気。平和な到着。

——ここが、アジア大陸の正面だ！

五月二十九日

空に持ち上げられた「角」、差し出された、鋭く、不満げな切っ先は、記念碑的の真の爪なのだろうか。いたるところにそれが取り付けられている。梁・庇として、切妻壁として、その「角」をまるごと表す屋根がないとき…… 政治的な道路。——沖積土の肥沃さ。電信柱が、ここで繁栄せんことを願う。

徐家匯

天文台と孤児院。善良な神々よ！ 中国の只中でボナパルト通り〔パリ六区の通り名〕の最悪の放蕩場にまた会うとは！ これらの美しい木材、木目も申し分なく、なかでは丸鑿がとても激しくかじっている——われに戻る、野性的で無邪気になるのだろう——、平手打ちを食らわすべき〈処女〉を産みおとしている。おおジョリスよ、あなたの侮蔑をすべてください！ あなたのこの上もなく苛立つた罵詈雑言を！ そして絵画といえ、本物の結膜炎の涙で泣くべき絵画の数々…… 一枚の板の上でうまくすりつぶされたバルサム〔植物がされる芳香性の樹脂〕と、すりこぎの下でわめきたてる黄鉛。ゴーガンゴッのような画家の絵の表面なら、大いに誇り高く歌うだろうが、ここでは大声で怒鳴っているだけ。そして賞賛される散歩は、断念されたままだ。子供たちに五年間のデッサンが強制されるから。

ベルギー王が同意した家具。（計画…事務机、象牙の玉縁で象眼された、四角に切られた中国脚を有する黒檀製の巨大なテーブル）アトリエは釉薬を塗られ、金色の、磨かれた市場になる。どの部屋にも見られるハーモニウム〔オルガン〕。告解室。地獄の恐ろしく、炒ったイメージ。改宗させるのに必要なすべてのもの。

キリスト教徒にはふさわしい。ときとして、ヨーロッパにおいてさえ、と優しいP・リシャル^(四)は断言する。たしかに賞賛に値する。値する。

五月三十日 中国の街

城塞、泥だらけの堀。重苦しい灰色、黄灰色の空の上にくっきりと輪郭を与えられた、いつもの廢墟と化した、銃眼のついたぎざぎざの壁の頂。低い門を通ってなかに入るとすぐに、路地がとても狭く、屋根や看板の突出した部分が天井のように空を覆っている。いくつもの面白いものを、これからわたしは見るだろう、そしてとりわけ、それらを知るのだから、(「手稿は条件法現在形。八七年版は單純未來形」)！

五月三十一日 蘇州

わたしは大陸に入り込んでいる。正確で便利な、イギリス式の線路。——まっすぐな平原、キアン(チベット)の娘。過度に排水された、金色で褐色の、豊かな畑。穂のあいだで、他の穂が倍の山をつくり、上手く育っている。わたしはそこに中国を認める。みんなが大重量を誉れとすることに。しかし、なんという巧妙な装置。水の上に、係留された、湾曲したともがいがあり、なすべき「努力」をすべて取り除いている。前方に棹があり、それを使って人の軽い体重でジャンクにブレーキをかける。多くの男性、女性を運ぶ、中央に大車輪がある手押し車……

ここには銃眼を設けた城壁があるが、それは、反対側の斜面上にいる敵に向けられた、細く十全な永遠の脅威だ。城壁は、驚くべき青白の空に向かって、薄暗く延びている。——門や橋、稜堡、路地、小路、ついで未開拓の土地、小さな丘、そして砂利を通して。「生来の空虚のイメージが中国のいたるところで示されるが、中国自体はなんとかなしですまそうとしてゐる。『名譽を讀えよう』と道德経はいう……」。

塔。底辺と頂点が等しい八角形、醜いもの。九階建て、灰色の瓦で再び覆われた八つの屋根。——階段の「算定」からして地面から帽子〔屋根・梁のこと〕まで五〇メートル、なんと中国的なことか。なかには誰もいない、托鉢僧以外は。木の階段。この建物は多かれ少なかれ四角形の穴のあいた中心核と囲いで構成されている。——その上から平原が見える。古い灰色の垂鉛で切り取られた銃眼は、灰色、灰色の屋根と白い切妻で砂礫を囲んでいる。一体全体、街はどこだ？ 木と、石と、人で作られた生地……

記念碑^(五)

〈丘〉、〈街の城壁〉の外

〈丘〉——おまえの歩みでわたしの背中を追いかけてよ。おまえの目は〈三門アーチ〉と皇帝の〈住居〉を発見するだろう。——しかし、わたしの柔らかい斜面でおまえの足はなんとぎくしゃくしていることか！ 平らな靴をはいた人間の足のなんと慣れていないことか。わたしはもはやロバの先の尖ったひづめしか覚えていない……

〔一九〕〇九年六月二十三日

〈三門アーチ〉——ためらってはいけない！ 異国の者ではあっても、迫持せりもちの一番高いところを通って、正当な権利として入り込むがいい！ 長いこと、三門アーチは埃しか、自分が告発する〈南〉に向かう〈北〉風しか通過させなかったのだが…… しかし、おまえの到来が、なんとここでは、真新しく響きわたっていることか！

〈館〉——〈亀〉。——ほう！ わたしは威厳を持って到着した者に向かって顎を上げる。わたしはここにいらる。立ち止まって、ゆっくりと見ろ。【明の最初の王の〈名前〉、明洪武の〈名前〉、莊嚴な〈純粹さ〉は重く】〔八七〕〈名前〉は、その威厳全体でわたしの殻にのしかかる…… わたしは永遠だ、聞こえるか？ おまえ、とても小さき者よ！ ——そう、頂は落ちた。わたしは明るい井戸の底を泳ぐ、垂直的な威厳で落ちる日の下を、そしてアーチの四つの光と入り交じったわたしの貝殻の反射光の上を流れるのだ。涸れ谷——ここ！ こちらだ！ 左折せよ…… わたしは〈東〉に導こう！…… おまえはわたしを跨ぐ〈橋〉を探しているのか？ それはもうない…… 駆け下りてふたたび昇れ…… おまえは赤い粘土で覆われているか？ 皇帝印がおまえの上にあらんことを。そしてここに、不動の〈獣の行進〉。

二匹の座っているライオン——行け！ われわれのあいだを通って行け…… おまえは知っているはずだ。われわれが犬以上に満ち足りていることを！

二匹の立っているライオン——われわれは笑うことなくお互いを眺めている。

二匹の座っている一角獣ユニコーン——われわれが動物だといってくれ。

二匹の立っている一角獣——そして鼻の上に何があるかを。